なごや文化情報

2017
3・4
March / April

No.373

NAGOYA
Cultural
Information

特集／2016　1年をふりかえって
平成28年度名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2017
3・4
March / April

表紙

作品
夜
（2015年／大理石、布、綿／W45×D45×H55㎝）

寝る前のリラックスした時間に突然気持ちを揺さぶられた時、その感情は言葉にすると消えてしまいそうで、体の中でモヤモヤさせながら素早く慎重にアトリエまで運びました。

（撮影 吉田慎也）

下平 知明（しもひら　ともあき）

1978年　佐賀県生まれ
2003年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了
2014年　「下平知明展」中京大学·Cスクエア
2016年　第13回大分アジア彫刻展大賞

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品…… 2
2016　1年をふりかえって…… 3
平成28年度　名古屋市芸術賞…… 9
平成28年度　名古屋市民芸術祭賞…… 10
おしらせ…… 12

「なごや文化情報」編集委員
倉知外子（現代舞踊家）
はせひろいち（劇作家·演出家）
森本悟郎（表現研究·批評）
山本直子（編集·出版 有限会社ゆいぽおと代表）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

「2015年　名古屋市民文芸祭」
（第六六回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部 受賞作品より

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立田代小学校4年
藤田　美幸

佳菜ちゃん

佳菜ちゃんは
足が速くて
一輪車が上手
字も上手だし
私とは
くらべものにも
ならない
何でもできる
天才少女みたい
友達の人数も
数えきれない
すみっこぐらしが
好きなところは
同じだけど
佳菜ちゃんのこと
少しうらやましいな

2016 1年をふりかえって

洋 舞 長谷 義隆(中日新聞放送芸能部編集委員)

中部バレエ界のドン、越智實氏が四月に長逝した。越智氏を筆頭に戦後間もないころから当地の洋舞の世界をけん引した第一世代は退場し、その弟子、子女たちの第二世代へと完全に代替わりした。さらに近年は海外留学や国際舞台での舞台経験を積んだ第三世代へと、世代交代が進みつつある。男女とも優秀なダンサーが増えたことにより、全体に舞台水準は高まっているが、一方で二極分化が進んでいる。

ひと時代前は、古典の全幕バレエを上演できるバレエ団は名古屋では五指に満たなかったが、群雄割拠、小スタジオが林立する近年は、やたらと全幕ばやり。チャイコフスキーの三大バレエですら、小スタジオのおさらい会にもかかる。しかし、作曲家が生きていたら憤激するような、発表会そうろうの全幕公演は願い下げにしたいものだ。

さて創作バレエでは、市川透の演出、振付によるBALLET・NEXT(バレエ・ネクスト)の「A Dog of Flanders」が収穫だった。古典バレエの大胆な換骨奪胎などで異能を見せてきた市川が一転、児童文学の名作「フランダースの犬」のバレエ化に挑み、観客にカタルシス(浄化作用)をもたらす新たな作風で魅せた。近年はバレエプロデューサーとして手腕を振っている松本道子が主催した「トリプル・ビル公演」は、フォーキンやバランシンら二十世紀バレエの名作を三本立て。次代に先人の遺産を橋渡ししようという松本の熱意がダンサーに乗り移ったような充実のステージであった。

松岡伶子バレエ団「シンデレラ」に主演した山下実可(左)と碓氷悠太(右)

三代舞踊団「Mの思想」

塚本洋子主宰のテアトル・ド・バレエカンパニーは、座付き振付家二人がそれぞれ佳作を放った。若手の井口裕之は新作「真夏の夜の夢」で複雑な恋のから騒ぎを手際良く料理し、物語バレエに進境。ベテラン深川秀夫はダンサーとして健在ぶりを発揮。深川版「春の祭典〜サン・ミッシェル島に慕いを馳せて」では、ストラヴィンスキーの音楽「春の祭典」によりつつ、夢幻能にも似た設定で奇想の愛憎劇を描き、存在感を示した。

古典バレエでは、東海テレビ文化賞を受賞した松岡伶子が、気品と温かみを兼ね備えた演出、振り付けにより「シンデレラ」を上演。名古屋市民芸術祭賞とダブル受賞となった。越智實氏の後継者、越智久美子の芸術監督初仕事となった「ドン・キホーテ」は入念な仕上げで、新生越智インターナショナルバレエの船出を飾る公演となった。

ダンスでは「あいちトリエンナーレ 2016」の舞台芸術公演が身体表現の最前線を紹介。名古屋初開催の「現代舞踊フェスティバル」では、愛知県岡崎市の石川雅実の「離脱する身体」が最優秀の「チャコット賞」を受賞し、当地のモダンダンス水準が全国区であることを示した。現代舞踊協会中部支部の「ガリバー〜人間(人体)への不思議な旅〜」は、会場を丸ごと舞台空間に見立てた演出で異彩を放った。

ジャズダンスでは三代舞踊団が、講談師で人間国宝の一龍斎貞水との「忠臣蔵」、箏曲正絃社合奏団とのセッションで和洋融合の新たな展開を見せ、さらに年末には新作「Mの思想」を発表、現代における武士道精神にスタイリッシュに迫った。

演 劇 安住 恭子(演劇評論家)

2016年は、3回目の「あいちトリエンナーレ」が開催され、内外のすぐれたパフォーミングアーツが多数上演された。その中で、愛知人形劇センターと損保ジャパン日本興亜が主催した並行企画事業「人類と人形の旅」は、地元の人形劇関係者の実力と幅の広さを示した。海外や東西からの秀作や人形劇の新しい試みなどの作品の上演に加え、「文楽人形オペラ」の新作を

制作・披露したのだ。江戸時代に名古屋でつくられ、大流行したとされる豊後節による『おさん伊八～睦月連理玉椿～』（齋藤敏明台本・演出、くりもとようこ作曲、8月）。名古屋で実際に起きた心中事件をもとにした物語を、オペラ歌手と人形との共演というユニークなスタイルで見せた。また、「舞台芸術公募プログラム」に選ばれたroom16の『沈殿タイ』（SABO作・演出、9月）も、名古屋の若手劇団の厚みを示す舞台だった。社会との違和感を抱える青年の胸の内を、構成的な手法による群像劇として展開し、感性の鋭さを示した。

ジャンルを越えた幅広い出演者によるコラボレーション作品としては、日本劇団協議会が制作した『出雲の阿国～いざや傾かん～』（ふじたあさや作、木村繁演出、川崎絵都夫音楽、工藤鍵道振付、12月）も見応えがあった。歌舞伎の祖とされる出雲の阿国が、それを生み出すまでの足跡だ。独自の芸で人を引きつけ、乱世を生きのびた阿国を、権力者との関わりを中心に描いた。常に新しい刺激を求める民衆やパトロンの欲望にもまれ、同業者と競い合いながら、新しい芸術を生み出していくそのさまは、いつの時代にも共通する芸術家の姿を思わせた。そしてそうした物語を、当時を彷彿とさせる歌や踊りを交えて華やかに展開した。それを可能にしたのは、演劇人だけでなく、狂言師や日本舞踊家らの参加があったからで、舞台に日本の芸能の原点が確かに息づいた。Mabo雅弥の打楽器と四恩朱の笛の生演奏が、それに現代的リズムとアクセントを加えた。

精力的に作品作りをしている劇団うりんこの新作『めぐる、ぐるぐる。』（永山智行作・演出、栗木健音楽、12月）も、生演奏の音楽が舞台を弾ませた作品だった。公園の大きな木の洞穴で目覚めた10歳の少年が、絵本の登場人物のような不思議な体験をする物語。王様の命令で、歌合戦に勝つための旅をすることになり、奇妙な人々に出会う。それらは実は、1年前に亡くなった父親が、息子を勇気づけるために見せた白昼夢だった。衣裳や装置もふくめて愉快な展開で、大いに楽しませながら、死者が愛する者を見守っていることを、しみじみと伝えた。打楽器奏者の栗木と共に、出演者達が入れ替わり立ち替わりで効果音とステキな音楽を生演奏した。

日本劇団協議会「出雲の阿国～いざや傾かん～」

劇団うりんこ「めぐる、ぐるぐる。」（撮影 清水ジロー）

一方、劇作家北村想の活動も目についた。東京で2本の新作を発表したほか、名古屋でも3本の旧作、新作が相次いで上演されたのだ。中でも、夢野久作の「ドグラ・マグラ」をもとにした、perky pat presentsの『DOWMA』（加藤智宏演出、4月）が、北村ならではの作品だった。「ドグラ・マグラ」は殺人事件と記憶をめぐる複雑怪奇なミステリーで、希代の奇書とされる。北村はそれを、女性医師と記憶喪失の青年の二人芝居として展開。夢野の難解な理論を演劇論に置きかえて解読し、言葉の洪水のような理論劇だったが、演出と出演者2人がしっかり咀嚼し、知的興奮をかきたてながら心地よく見せた。

洋　楽　早川 立大（音楽ジャーナリスト）

あいちトリエンナーレ2016や、国民文化祭・あいち2016の開催をはじめ、名古屋フィルハーモニー交響楽団（以下、名フィル）と愛知県立芸術大学（以下、県立芸大）がともに創立50周年を祝うなど、クラシック音楽界は活況を呈した。

［声楽］最大の話題はオペラの上演が盛んで、質も高かったことが挙げられる。筆頭は名古屋二期会の『蝶々夫人』だ（10月22、23日、愛知県芸術劇場大ホール）。ダブル・キャストで演じられたプッチーニの名作では、標題役に若手の渡部純子と浅井恵子が起用され、伝統的な舞台を極限まで美化した岩田達宗の見事な演出によって、近来にない水準の濃密な出来栄えだった。県立芸大は同じくプッチーニの『ラ・ボエーム』（9月25日、同）で50年記念を祝って総力を傾けたし、東海バロックプロジェクトオペラ制作委員会によるモンテヴェルディの傑作『ポッペアの戴冠』は愛知初演で、池山奈都子演出の上質の舞

台となった（9月24日、名古屋市芸術創造センター）。これに対し、あいちトリエンナーレ2016プロデュースオペラ、モーツァルトの『魔笛』は勅使川原三郎の新演出が評判になったものの、歌手陣やオーケストラ（名フィル）の頑張りにもかかわらず、理念重視の舞台が観劇の悦びを幾分なおざりにした嫌いなしとしない（9月17、19日、愛知県芸術劇場大ホール）。ほかに世界初演の青木涼子『秘密の閨』（10月23日、アートピア）、くりもとようこ作曲の文楽人形オペラ『おさん伊八～睦月連理玉椿～』（8月19、20、21日、損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホール）、創作オペラ『雪おんな』（12月23、24日、名古屋市瑞穂文化小劇場）と、新作も目白押し。

演奏会形式ながら、ワーグナーの楽劇『ラインの黄金』に挑戦した愛知祝祭管弦楽団の壮挙にも拍手を送りたい（9月11日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。独唱では初鹿野剛（バリトン）のシューベルト『美しき水車小屋の娘』に指を屈する（2月24日、ザ・コンサートホール）。

［器楽］オーケストラでは、名フィルの音楽監督に小泉和裕が就任。4月定期（就任披露）公演をはじめ、2日にわたるバースデー・コンサートを指揮するなどして、気心の合ったところを見せた。セントラル愛知交響楽団では指揮者に就任した角田鋼亮が第145回（2月6日）と第147回（5月13日）の定期公演に登場、山田耕筰の交響曲「かちどきと平和」やリヒャルト・シュトラウスの交響曲第2番といった、滅多に演奏されない作品を取り上げて、清新な息吹を吹き込んだ（しらかわホール）。愛知室内オーケストラは第17回定期演奏会を常任の新田ユリが指揮し、ニールセン、ゲーゼらを得意とする北欧作品で気を吐いた（10月1日、ザ・コンサートホール）。

名古屋二期会「蝶々夫人」

中木健二リサイタル

室内楽では中堅のヴァイオリン名手、植村太郎がピアノの田村響らと組んだドヴォルザークのピアノ三重奏曲の夕べが出色の出来栄え（10月1日、宗次ホール）。また、ピアニストの桑野郁子を中心とする室内楽集団アンディアーモと県立芸大弦楽器教員グループによる2つのブラームス室内楽作品全曲演奏会はそれぞれ2年目に入り、引き続き充実した演奏を重ねた。最後に、いずれも宗次ホールで行われたピアノの北村朋幹（4月9日）、ヴァイオリンの島田真千子（5月8日）、チェロの中木健二（11月26日）の各リサイタルを挙げておこう。島田はバッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全6曲を、中木もバッハの無伴奏チェロ組曲6曲を一挙に取り上げ、高い表現力を披露した。

能楽　竹尾 邦太郎（能楽評論家）

1月、名古屋能楽堂定例公演は『正月特別公演』吉例の「翁」シテ久田勘鷗。注連が張られた舞台は如何にも「翁」は能であって能に非ず、の瑞気横溢神聖な雰囲気、厳粛に勤める。

3月『名古屋宝生会』は「小鍛冶」内藤飛能。勅命を受けた刀匠三条小鍛冶宗近（ワキ高安勝久）、御剣とあり相鎚に人を得なければ適わずと苦慮、稲荷明神に祈念すれば明神の化身・狐（シテ内藤飛能）、任せよ、とばかり狭い一畳台（鍛床）へ颯と跳び上がり務める相鎚、生きの良い若さに躍動。

『名古屋能楽堂　三月定例公演』「山姥」久田勘鷗。遊女百万（ツレ）が百万山姥と持て囃されるのも「山姥ノ曲舞」作者の存在。それが一顧だにされぬ恨みに是非一節、と迫る女（前シテ勘鷗）、遊女が恐れ舞いかけるを押し止め、月の出に我も真の姿で舞はん、と消える。後場、真の姿は異様な風貌の山姥（後シテ勘鷗）、善悪不二の哲理を述べ、苦しい山廻りの精神世界に映る景を吐露する。力強い謠に確かな型、近年の充実ぶりを発揮。

「山姥」H28.3.5 名古屋能楽堂三月定例公演
シテ　久田勘鷗
撮影 杉浦賢次（能楽写真家協会会員）

5月『西村同門会　研究能』「大蛇」記紀、素戔嗚尊（スサノオノミコト）が八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した神話。素戔嗚尊（ワキ飯冨雅介）、老翁（前シテ長田郷）と老嫗（ツレ）、娘（子方）を前に愁歎の姿を目撃、その仔細を

「大蛇」H28.5.8 西村同門会研究能　名古屋能楽堂
左からワキ 飯冨雅介、シテ 長田 郷
撮影 杉浦賢次（能楽写真家協会会員）

知り、策を凝らし退治に。前後を通じワキが大活躍の舞台は、同情する前場から義憤に駈られる後場の大蛇との激しい切組まで、ワキが芸劫の貫禄を見せればシテはきびきびした働きぶり、稀曲ゆえに上演の少ないのは残念。

『第59回やるまい会』松田髙義「花子」披キ。情人・花子に逢いたい一念で口実を設け、暇を申し出る男（シテ髙義）に、女房（アド野口隆行）はやっと一晩の暇、しかも持仏堂での座禅を許可。男は修行中面会謝絶と女房に念を押し、太郎冠者（アド奥津健太郎）には言い含めて身替りをさせ、意気揚々と花子の方へ。虫の知らせに女房が太郎冠者と入れ替ると、さて、男の朝帰り。小歌交じりに花子との逢瀬を得々と太郎冠者相手に惚気ている筈が、豈図らんや相手は女房で周章狼狽の男。女の深情けは嫉妬と表裏か、色気たっぷりの可笑味の艶笑譚堪能させ上々の披キ。

6月『名古屋観世会』「犬山伏」、茶屋（アド松田髙義）で出合う穏やかな僧（アド奥津健太郎）と、茶が熱いのぬるいのと文句つける横柄な山伏（シテ野村又三郎）との間に一悶着。茶屋が仲裁し、飼犬の猛犬手懐けた方を勝とすることに。威猛高な山伏が神妙に数珠を繰り折伏せんとするが、犬（アド野村信朗）に吠えられたじろぐ。実の親子共演の図が妙。

『名古屋宝生会』「歌占」度会（ワタライ）何某（シテ和久荘太郎）、廻国の折、頓死も三日後には蘇生する白髪の奇、臨死体験は地獄を見てきた事もあろうか。短冊を付けた小弓を持ち、歌占がよく当たると、父に生別の幸菊丸（子方 奥津健一郎）を伴う連れの男（ツレ辰巳大二郎）、何某を訪ね歌占を引けば卦は当り、父は目の前に奇遇。勇躍吾子と連れ立ち帰国の何某に、男は名残りに地獄ノ曲舞を所望。これを舞えば神が憑き正気失うが、と意を決し舞う度会の何某・和久荘太郎、難解な二段グセの長丁場も口跡爽やかに活き活きと明快に、切れのある曲舞も力溢れ鮮やか。子方も確りと、これも親子共演の好舞台。

7月『第17回御洒落名匠狂言会』「柿山伏」渇きを覚えた山伏（シテ井上蒼大）、断わりはしても畑主（アド井上松次郎）不在、已むなく柿（床几で擬える）に上り、捥いでいると見廻りの畑主に見咎められ、慰みとばかりあれは犬か、猿か、と狭い木の上で様々な生態模写を強いられ、弄ばれ、挙句は鳶にさせられ墜落の憂目に。可憐な蒼大君の大成を祈る。

12月『青陽会研究能』「千手」シテ（星野路子）、平重衡（ツレ八神孝充）。出家叶わぬ囚われの重衡の神妙、慰めに遣わされる千手ノ前の慎ましさ。しみじみした情感に寂しみ惻々、小品ながらキラリと光る。

邦舞・邦楽　北島 徹也（CBC テレビ　事業部 専任部長）

日本舞踊は、『雪の舞』（赤堀加鶴繪）が印象に残る名古屋日本舞踊協会「新春舞初め会」（1/9 市民会館）、「工藤会」で倉鍵は『吾妻八景』と『静と知盛』を、『釣女』（彩夏、春佳）、『粟餅』（扇弥、寿々弥）と家元一家の出演（2/11 中日劇場）。西川流は、鯉之亟、鯉娘「ふたり華」（4/30 市民会館）の『神田祭』がイキ合って爽やか。「長寿乃會」（5/21 市民会館）で長秀は『舞遊鳥獣戯画巻』を、京志郎、ももよ、章之人ら若手と共演。「名古屋をどり」（9/7 ～ 11 中日劇場）は今年も「観光化」を宣言した家元のプロデュース感覚、ビジネスとの接点の模索は注目されるべき。千雅は『双面』を踊り分けて古怪、『鳴神』も奮闘、まさ子は『釣女』を過剰に陥らず品良く、陽子は『秋の色種』、菊次郎は『年増』でしっかりと個性を発揮した。名妓連は大須演芸場で「やっとかめの会」（10/17 ～ 19）、『越後獅子』や名物『金の鯱鉾』を披露した。また、西川茂太郎が急逝（4/30 75 歳）、追悼の「志げる会」（9/17 市民会館）では、えつが『吾妻八景』、満鶴と珠未、絵未の『都風流』などを手向けた。

「赤堀加鶴繪舞踊会」（6/12 市民会館）新作は『迦楽（からく）理（り）』。シルクロードのイメージが漂い、操り操られ交錯する感覚が面白く、箏曲『心の花』が優美。名古屋市民芸術祭特別賞受賞記念「桜美の会」（6/25 能楽堂）は、ホルストを地に『夢に向かって ジュピターより』を再演、五條園美が『鳥刺し』をさっぱりと踊った。

梅奈香会（4/29 市民会館）で花柳梅奈香は『鐘』を芝居っ気たっぷりに踊り分け、「内田流舞踊会」（8/27 市民会館）は、飄逸な『喜撰』（るり美知）、さまざまな海の表情の『新曲浦島』（有美）、寿子は新曲の長唄『舞』を阿国に見立てて。「稲垣流豊美会」（8/27 北文化小劇場）で、舞比は珍しい『狸八島』、友紀子は新内『滝の白糸』を斎千龍の弾き語りで出した。また、「御園座を盛り上げ隊・勝手連」もはや5回（8/21 居東屋）、旗振り役の花柳朱実はじめ地元の舞踊家、邦楽演奏者の〝紅白〟めいた面白さ。地歌舞の山村楽乃は「座敷舞の会」（10/24 今池ガスホール）で地歌『夕顔』と『葵上』を舞った。

名古屋市芸術創造センターが、愛知芸術文化協会と共に創った「椿説曾根崎心中夢幻譚」（12/10 芸術創造センター）は、五條園美門下、セントラル愛知交響楽団、箏曲正絃社、さらには唄と三味線、能が、ジャンルを横断して新たな

舞台創造への意欲を見せた。

第 60 回「中京五流舞踊」(12/25)が来年閉場の中日劇場では最後の開催。『常磐の庭』(花柳流)、『吉原雀』(藤間流)、『梅の栄』(赤堀流)、『旅』(西川流)、最後に『近江のお兼』(工藤流)で華やかに幕となった。

長唄は、杵屋見音代「見音代会」(3/27 中電ホール)が 50 回の記念公演で『多摩川』、小学生 14 人の『菊づくし』など、杵屋勝桃「勝桃会」(4/10 今池ガスホール)は第 20 回、『梅の栄』、こちらも小学生から高校生で『ともやっこ』を、貴音鈴友「友音会」(4/17 今池ガスホール)は一同での『勧進帳』などを出した。杵屋三太郎「杵三会」(10/9 今池ガスホール)では小学校のアフタースクールの子供たちの『お月さま・小品集』も出て、いずれの会も邦楽人口の減少に抗してさまざまな努力。杵屋六秋・六春「おやこ会」(11/12 今池ガスホール)は十世杵屋六左衛門をテーマに『鳥羽絵』と『外記猿』。特筆すべきは、杵屋勝千華がハワイでワークショップと演奏会を催したこと。いずれは教場を、との意気込みやよし。

赤堀加鶴繪舞踊会「迦楽理(からくり)」

名古屋長唄大会(2/29 芸術創造センター)は第 40 回、『吾妻八景』を内田寿子、工藤倉鍵、西川千雅、花柳朱実、藤間式部の立方で。

小唄は、春日とよ恵の逝去(6/22 85 歳)が惜しまれる。一方、稲舟妙寿は創立 50 周年記念小唄会(5/1 中日劇場)を催し、名古屋市芸術賞芸術奨励賞を得た。錦派は四世家元 錦春襲名披露の小唄会(10/16 大須演芸場)で催したが、名を譲った三世錦春改め二世錦秋は 11/19 に 89 歳で逝去、ご冥福をお祈りする。

国風音楽会は弁財天奉納(4/10 西文化小劇場)、生田祭(9/25 中電ホール)の箏曲演奏会、糸竹会千回記念と南川久子追善の三曲演奏会(7/9 西文化小劇場)を催した。

国民文化祭・あいち2016の一つとして「邦楽の祭典 愛故知新一愛知から未来へ響く 伝統の調べ」(11/3 市民会館)も華やかに催された。

長唄友音会「勧進帳」

美　術 田中 由紀子(美術批評 / ライター)

2016年の名古屋エリアのアートを語るうえで、「あいちトリエンナーレ2016」の開催は外せないだろう。「虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」をテーマに38の国と地域から119組のアーティストが参加。8月11日～10月23日の74日間で60万人を動員した。ここで触れたいのは、この会期中に初回、前回とは比べものにならない数の展覧会やアートイベントが県内各所で開催されたことだ。これは祝祭感を共有し、トリエンナーレの来場者を取り込もうとする意図もあってのことだろうが、結果的にトリエンナーレの定着ぶりを広く伝え、この地域のアートシーンの盛り上げに寄与した。なかでも評価が高かったのは、名古屋港エリアで連携事業として展開された「アッセンブリッジ・ナゴヤ2016」だろう。展覧会「パノラマ庭園ー動的生態系にしるすー」では、港まちポットラックビルや旧名古屋税関港寮、空き店舗など14か所に18組のアーティストの作品が展示された。近年ありがちな、まちなかを舞台としたアートイベントに見えなくもないが、参加者とのワークショップ形式で空き店舗の改修を進める「空き家再生スクール」や、地域の家庭から回収した生ゴミを堆肥化してコミュニティガーデンを造成する「みなとまちガーデンプロジェクト」との連携など、一過性の取り組みに終わらない、継続的なまちづくりの視点が読み取れた。

トリエンナーレの成果として、初回から会場となっている長者町が、若手アーティストの活動拠点として定着してきたことにも触れておきたい。社屋移転に伴い、解体されることになった岡地株式会社の旧社屋で開催された展覧会「オカチなAMR」は、長者町トランジットビルに構えられた共同アトリエAMRのメンバーの自主企画によるもの。アーティストがイベント時にとどまらず、継続的に地域に深く関わり、主体的に発表の場を創出しようとする取り組みとして評価したい。

一方、美術館では豊田市美術館「山本富章 | 斑粒・ドット・拍動」と「杉戸洋ーこっぱとあまつぶ」が、豊田市美術館ならではの建築空間の中で、作家の独自の絵画スタイルを来場者に体感させる試みに成功。ギャラリーではギャラリー Laura

アッセンブリッジ・ナゴヤ2016「パノラマ庭園ー動的生態系にしるすー」展示風景
（徳重道朗《山並み》2016年）撮影 怡土 鉄夫
画像提供:アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会

「音のない風景 伊藤千帆」、gallery noivoi「西山弘洋 ルック・フォー・ホール」、gallery+cafe blanka「LITHOGRAPH：Lighter but Heavier」など、見ごたえある展示が多かった。また電気文化会館では、開館30 周年記念として「THE NEXT 次世代を創る 10 人の表現者たち」が開催。東海エリアの 10 ギャラリーから 1 名ずつ選ばれた若手の作品が、ブースごとに展示されるというアートフェアのような構成だったが、各ギャラリーと所属アーティストの力量が発揮されており、この地域のギャラリーの活動を展観できる機会となった。

トリエンナーレの開催を軸に 2016 年をふりかえったが、トリエンナーレは3年に1度の起爆剤でしかない。ここでアートに興味・関心を持った人々を、日常的に地域の美術館やギャラリーにいかにして引き込むかが、今後の課題といえよう。開催年以外でのトリエンナーレと地域の美術館との連携や、これまで芸術大学との連携企画や若手作家の紹介が中心であったアートラボあいちの活用の見直しなど、新たな取り組みに期待したい。

「THE NEXT 次世代を創る10人の表現者たち」展示風景
（佐藤貢《108 Crosses》2016年）

文 学　清水 良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

坪内逍遥、二葉亭四迷をはじめ、江戸川乱歩に金子光晴――近代文学の多くの巨匠たちが名古屋を主としてこの地域に深いルーツを持っていた。その一人一人を丹念に紹介しつつ、現地にも足を運んで探訪したのが、三田村博史の労作『東海の文学風土記』（中日新聞社）である。こんな人も、という名前が並ぶ。名古屋市や愛知県の文化行政は、モノ作りと戦国武将ばかりでなく、近代文学発祥の都市の誇りをもっと示してもらいたいものだ。

映画と演芸の評論だけでなく、初期アニメーションに関する博学で知られた森卓也の30年間のコラムの仕事を集大成した『森卓也のコラム・クロニクル1979－2009』（トランスビュー）も、圧巻のボリュームと内容で昨年を代表する出版物といえる。

故・山田登世子氏

フランス文学者としての翻訳に留まらず、ココ・シャネル論を軸とした近代ファッションや芸術文化に関する華麗なエッセイで知られた山田登世子が8月に急逝したことは、全国的なニュースになり多くの人が彼女の才能を惜しんだ。享年70歳。遺作となったのが『「フランスかぶれ」の誕生　「明星」の時代 1900－1927』（藤原書店）である。与謝野鉄幹主宰の雑誌「明星」を舞台に活躍した近代ロマン主義の作家や詩人たちのフランス体験を追体験するうちに、どんどん彼らの日本語が薫陶を受け生まれ変わっていくありさまが浮かび上がる。同時にそこには、アメリカ主導のグローバリゼーションによって言葉が単純で貧困になっていくばかりの現状への痛烈な憤りが隠れてもいる。学問的探求と批評精神と文学的修辞が見事に一体化した稀有な書き手だった。年末には東京でも「送る会」が行われた。

「フランスかぶれ」の誕生
「明星」の時代 1900－1927
（藤原書店、2015年）

小説では吉川トリコの『光の庭』（光文社）での成長ぶりが印象深い。16年前に殺害された仲間の死をめぐる女友達たちを描いたミステリー風の作品だが、死と罪を問う重い主題を書き切った。広小路尚祈の「あいつのいた街」（「すばる」12月号）も、格差社会の底辺で生きる若者たちの明日の見えない青春を叙事詩のように描いた。

同人誌の作品では、猿渡由美子の活躍が目立った。特に家族関係が希薄なまま「家」での暮らしに惹かれていく「ミスター・ヒビキ」（「じゅん文学」88号）は秀作といえる。その他、木戸順子「ディスタンス」（「弦」99号）、長沼宏之「秋の間奏曲」（同）、宇梶紀夫「氾濫」（「海」93号）、国府正昭「海原を越えて」（同94号）が収穫だろうか。東日本の被災地のルポである伊神権太の「海に向かいて一瞬き」（「OFF」1号）も忘れがたい。

平成28年度 名古屋市芸術賞

平成28年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

宗田 理（そうだ おさむ） 文芸【小説】

昭和12(1937)年、父の死により母の実家のある幡豆郡一色町(現西尾市)に転居し、碧南の学校へ進学し終戦を迎える。昭和24(1949)年、日本大学芸術学部へ進学、卒業後は企業出版部で編集の職に就き雑誌創刊に携わり、その後、企業PR会社を立ち上げるも解散。昭和48(1973)年、妻の実家近隣の豊橋市に転居し、以後19年間豊橋で執筆活動をする。昭和54(1979)年、「未知海域」で直木賞候補となり、小説を通して社会問題に取り組む。昭和57(1982)年、東京タイムズにて「少年霎団(かなごろし)」が連載されると角川書店から声が掛かり、昭和60(1985)年、角川書店より「ぼくらの七日間戦争」を刊行、映画化。シリーズとなり現在までの発行部数はシリーズ累計1600万部を超え、小・中学生を中心に読者を獲得し続ける。

平成4(1992)年、名古屋市東区に転居し、今日まで24年間名古屋市から全国へ発信する作家活動を続けている。市内図書館をはじめ県内・国内の小・中学校での講演実績は多い。平成11(1999)年、「2年A組探偵局　仮面学園殺人事件」を角川書店より刊行し翌年映画化。また、豊橋ふるさと大使に就任し、豊橋を舞台にした小説を刊行、映画化もされたほか、幡豆郡幡豆町(現西尾市)の町おこしとして小説をウェブにて連載するなど、新しいことにも挑戦している。

「ぼくらの太平洋戦争」等、次の世代への伝承・読書文化の普及により、当地域の芸術文化の振興に果たしてきた功績は多大である。

芸術奨励賞

一般社団法人愛知室内オーケストラ 音楽【オーケストラ】

平成14(2002)年、愛知県立芸術大学出身の若手奏者により「愛知室内合奏団」を結成。平成16(2004)年には名称を「愛知室内オーケストラ」に改称し活動の充実を図る。主催公演では、平成17(2005)年から定期演奏会をはじめ、親子向けのファミリーコンサートを毎年開催。楽団員自らが企画・演出をする音楽物語等趣向を凝らした内容に定評がある。また、ワークショップとコンサートを1日がかりで行うイベントに多数出演し、毎回好評を博しているほか、学校公演、小編成での室内楽コンサート、合唱団との共演、オペラ、ミュージカルへの出演、イベント出演など多彩な活動を行っている。

平成22(2010)年にCD「モーツァルト～クラリネット協奏曲」(指揮・クラリネット:磯部周平、管弦楽:愛知室内オーケストラ)をマイスターミュージック社より全国発売し雑誌「レコード芸術」に取り上げられる。平成23(2011)年に一般社団法人となり、平成27(2015)年には新田ユリが常任指揮者に就任。定期演奏会を年2回に増やし、プログラムには北欧音楽を積極的に取り入れる等、知られざる作品を数多く紹介。より緻密なアンサンブルの追求とともに北欧音楽の響きの探求にも力を注ぐ。

地域や青少年の音楽振興を目指した文化活動に尽力するほか、名古屋では珍しい独特のプログラムがメディアにも取り上げられる等、当地域における芸術文化の振興と向上に貢献し、今後も活躍が期待される。

稲舟妙寿（いなふね たえじゅ） 伝統芸能【小唄】

昭和40(1965)年、稲舟派の師範となり小唄・三味線教室を開講、昭和63(1988)年には稲舟派二代目家元を継承し、小唄と三味線の指導と普及に尽力する。昭和41(1966)年より出演するNHKFMラジオでの邦楽演奏は、現在まで続いている。昭和57(1982)年より、効果音・照明・舞台装置・演者等で表現し、視覚からも楽しめる「視る小唄」を企画・公演。

平成3(1991)年からは、詩の言葉の意味、時代背景などを解りやすく説明しながら演奏する「唄とお話」を開始。平成14(2002) 年度、愛知県芸術文化選奨文化賞(個人)受賞。平成18(2006)年度、詩を字幕スライドとして投影したリサイタルに対して、名古屋市民芸術祭審査員特別賞を受賞。

また、谷川俊太郎、まど・みちお、新川和江といった現代の詩に曲をつける「童小唄」や、平成15(2003)年から始めた小・中・高等学校への指導等、子供たちへの邦楽の普及活動を行うほか、平成23(2011)年からは、ハワイ大学やハワイパシフィック大学ほか数校と、3年にわたり講演や指導を行う等、海外との交流も図っている。

今までの小唄の概念に捕らわれず、次世代への継承だけでなく、日本舞踊、洋舞、演劇、朗読等とのコラボレーションに積極的に参加する等、各分野との交流にも力を入れており、小唄・三味線を通して、今後の当地域の邦楽の発展に寄与することが期待される。

大野左紀子（おおの さきこ） 美術【美術・映画評論】

昭和57(1982)年、東京藝術大学美術学部を卒業、翌年より美術作家活動を開始する。平成6(1994)年「POSITION1994」(名古屋市美術館)、平成8(1996)年「イメージの森」(荻須記念美術館)、平成13(2001)年「旅する包み」展(PROJECT304、バンコク)ほか、個展やグループ展を多数開催する等、市内外で広く活躍。また、河合塾美術研究所を経て、平成7(1995)年より名古屋芸術大学非常勤講師として、現代美術演習やデザイン基礎、立体造形、ジェンダー入門等の科目を担当し、次世代の育成にも取り組む。平成16(2004)年、学術論文「彼女のダイビング(映画におけるヒロインの死と再生)」(名古屋芸術大学研究紀要第25巻)を発表。平成27(2015)年からは、京都造形芸術大学客員教授として、「日本における美術の受容と美術教育」、「観る、読み解く、書く」(映画分析)の講義を行う。

平成15(2003)年、美術作家を廃業し、文筆活動に入る。平成20(2008)年「アーティスト症候群　アートと職人、クリエイターと芸能人」(明治書院)、平成21(2009)年「「女」が邪魔をする」(光文社)、平成24(2012)年「アート・ヒステリー　なんでもかんでもアートな国・ニッポン」(河出書房新社)、平成27(2015)年「あなたたちはあちら、わたしはこちら」(大洋図書)ほか、著書多数。

アートのあり方や意味を、平易な言葉遣いで根本から問いただす意欲的な姿勢と、映画評論における柔軟なジェンダー視点に独自性があり、当地域において今後も活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2016　名古屋市民芸術祭賞

名古屋市文化振興事業団では、平成 28 年10月から11月の2ヶ月間にわたり、全25 事業（主催事業 5、参加公演20）に及ぶ「名古屋市民芸術祭2016」を開催しました。その参加公演20公演（音楽 8、演劇 4、舞踊4、伝統芸能4）の中から、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に価する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（2公演）

11月14日（月）19：00
電気文化会館ザ・コンサートホール

音楽部門　窪田健志 打楽器リサイタルvol.3「古からのリズム、そしてウタ」

様々な打楽器を縦横に駆使し、高度な技術を披露した。鍵盤打楽器であるマリンバやビブラフォンでは曲を豊かに歌い上げ、この楽器の奥深さと可能性を示した。さらに、演出にも工夫を凝らし、エンターテインメントとしても聴衆を楽しませた。また、プログラムやチラシのデザインも含めて、完成度の高い意欲的な公演であった。

プロフィール

05年　東京藝術大学音楽学部打楽器専攻卒業
　　第22回日本管打楽器コンクール第3位
07年　東京藝術大学大学院修士課程修了
　　第1回ソロリサイタルを長野県上田市で開催
10年　（財）名古屋フィルハーモニー交響楽団ティンパニ・打楽器奏者に就任
11年　第28回日本管打楽器コンクール第2位
13年　（公財）名古屋フィルハーモニー交響楽団首席ティンパニ・打楽器奏者に就任
13年～洗足学園音楽大学非常勤講師
　　第2回ソロリサイタルを東京・名古屋・京都で開催
14年　名古屋市民芸術祭特別賞（ベストアーティスト賞）受賞
　　青山音楽賞受賞
15年～名古屋市立菊里高校音楽科非常勤講師

11月27日（日）17：00
愛知県芸術劇場大ホール

舞踊部門　松岡伶子バレエ団公演「シンデレラ」全二幕

バレエらしい幻想的な美しさにあふれ、スピーディーな展開の中にコミカルな味付けを施した上質な舞台であった。演出・振付の松岡伶子は適材適所の配役で若手、ベテランの自発性、持ち味を引き出して秀逸。主要スタッフから配役、管弦楽までほぼ自前、地元の才能を活用して、優れた総合舞台芸術を創造したことは賞賛に価する。

プロフィール

52年　名古屋市内に研究所開設
56年　第一回発表会を開催
　　以来、毎年、研究生発表会とバレエ団公演を開催し現在に至る
77年　古典作品「ジゼル」のジゼル役を最後に松岡伶子が引退し、その後、演出・振付を中心に後進の指導に当たる
93年　名古屋市民芸術祭賞受賞
98年　舞踊文化功労賞ほか受賞
00年　名古屋市民芸術祭賞ほか受賞
01年　名古屋市芸術特賞受賞
02年　愛知県教育表彰受賞
06年　愛知県教育文化功労者賞受賞
07年　地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞
08年　第 19 回財団法人松山バレエ団顕彰芸術賞受賞
16年　東海テレビ文化賞受賞

その他、都市文化奨励賞、名古屋演劇ペンクラブ賞、愛知県芸術文化選奨文化賞、優秀指導者賞など多数受賞。

授賞式

名古屋市芸術賞、名古屋市民芸術祭賞の授賞式が下記のように開催されました。

日　時　平成29年2月1日（水）15:00
会　場　名古屋市役所本庁舎5階　正庁

名古屋市芸術賞

名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭特別賞（3公演）

11月16日（水）19：00
電気文化会館ザ・コンサートホール

音楽部門（企画賞）　小林史子ソプラノリサイタル「ヨーロッパの東の風」vol.2

あまり馴染みのない東欧の作曲家ヤナーチェクに焦点を当てた企画が光った。また、曲間に解説が入ることにより、初めて聴く曲でも理解できるよう工夫されていた。一方、作品の持つドラマ性を見事に表現した歌唱力の高さが特筆される。歌曲からオペラまで選曲も充実しており、企画力に富んだ演奏会であった。

プロフィール

79年　愛知県立芸術大学卒業、桑原賞（県知事賞）受賞
フランス音楽コンクール1位
81年　同大学院修了
83年　中電ホールにて初リサイタル開催
ロータリー財団奨学生としてイタリアに留学
84年　F.P.Neglia国際コンクール第3位
ヴィオッティ国際コンクール入選
85年　ヴェルディ音楽院卒業
01年　NHK名古屋ニューイヤーコンサート　ヴェルディ特集に出演
08年　第11回リサイタル（プッチーニ生誕150年）が、「名古屋ペンクラブ賞」に選ばれる

現在、名古屋音楽大学、金城学院大学非常勤講師。
名古屋市民コーラスヴォイストレーナー。
NHK文化センター講師。
ABCアカデミー主宰。

11月11日（金）～13日（日）<6回公演>
七ツ寺共同スタジオ

演劇部門（奨励賞）　空宙空地第5回本公演「轟音、つぶやくよう うたう、うたう彼女は」

ジェットコースターのようなスピード感とメリハリのある脚本・演出で、人生模様をうまく描き上げた。観客が主人公らに自分を重ね合わせて共感できる構成で、人間愛が息づく作品に仕上がっており、幸福感に浸ることができた。また、丁寧かつ誠実に演じた俳優の演技力も光った。同時に上演された短編も同じテーマで展開され、最後まで楽しく鑑賞できた。

プロフィール

13年　おぐりまさこ個人ユニットとして設立・始動
「空中のエス」（関戸哲也短編集）上演
14年　第1回本公演「零年－ディア・アルジャーノン」上演
一人芝居「ライト」を「INDEPENDENT:NGY14」（名古屋）にて上演、本戦（大阪）にて招聘上演
15年　第2回本公演「ダブルB面フォノグラフ」上演
一人芝居「ライト」を「INDEPENDENT:SPR15」（札幌）にて招聘上演、第3回本公演「ガラスのエイリアン」上演、一人芝居「如水」「INDEPENDENT:15」本戦（大阪）にて招聘上演
16年　第4回本公演「砂に浮かぶ町」上演、一人芝居「如水」が「INDEPENDENT:3SS」に抜擢され、全国6都市で上演

11月26日（土）14：00
名古屋能楽堂

伝統芸能部門（精励賞）　第15回狂言三の会公演 ～十四世野村又三郎斯道四十周年記念～

大曲を含む上演三曲ともにシテを演じ、四十周年を迎えた野村又三郎の芸道精進のほどがうかがえる奮闘ぶりだった。また、「三本柱」の若手をはじめ中堅の充実度が増しており、将来の発展を期待することができる公演となった。各々の芸を吟味し、今後もさらに芸の道を邁進する野村又三郎と一門の熱意を感じた。

プロフィール

02年　和泉流野村又三郎家の嗣子・野村小三郎を後援する会として発足
第1回狂言三の会公演を開催
以降、年一回の自主公演を開催
08年　会の役割を小三郎後援会から、野村家門下の後援会へと拡大
09年　第8回公演で、野村小三郎主演による狂言の大曲『釣狐』上演
11年　四世野村小三郎が十四世野村又三郎を襲名
第10回公演、又三郎襲名記念公演として、式楽『翁』など大曲を上演
12年　第11回公演、埋もれていた独演狂言『蜂』を復曲上演
復曲づくしの催し
13年　第12回公演、又三郎の長男・野村信朗が子方の大役『牛盗人』を上演

文化事業への寄附金を活用し 創造性と都市の魅力を高める 文化力によるまちづくりを 目指しています。

支援と育成
芸術や文化活動の支援と育成をしています。

参加と交流
みなさまが参加し交流できる事業を展開しています。

芸術の鑑賞
文化や芸術のご紹介や鑑賞機会を提供しています。

情報の発信
さまざまな芸術や文化の情報を発信しています。

ご寄附のお問い合わせ ｜ ご寄附は、いつでも受け付けております。

ご寄附の際は、インターネットを利用したクレジット決済(クレジット寄附)もご利用いただけます。

名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

公益財団法人 名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

税の控除について ｜ この寄附金は、ふるさと納税の対象です。

ふるさと納税 FURUSATO

○個人の場合 ｜ 確定申告によって、以下の金額を所得税及び個人住民税から控除することができます。

所得税(所得控除)

寄付金額 又は 総所得の40% のいずれか低い金額 ⊖ 2千円 ⊜ 寄付金控除額

＊特例控除額＝(寄附金額－2千円)×(100%－10%(基本分)－所得税率)

個人住民税(税額控除)

寄付金額 又は 総所得の30% のいずれか低い金額 ⊖ 2千円 ⊗10% ⊕ 特別控除額 ⊜ 寄付金税額控除額

※所得税率は復興特別所得税を含めた率 ［注意］特例控除額は 所得割額の2割を限度とします

○法人の場合 ｜ 寄附された金額を法人税法(第37条第3項第1号)の規定により損金算入することができます。

「ふるさと納税ワンストップ特例制度」をご利用いただけます。

ふるさと納税をした翌年に確定申告を行うことが必要です。ただし平成27年4月1日以降は、寄附時に「ふるさと納税ワンストップ特例制度」の申請をしていただくことで、確定申告をしなくても控除を受けられるようになりました。(特例制度は、給与所得者等の方で、確定申告の必要がない方、寄附先の都道府県及び市区町村が5団体以下の方に適用されます)
※確定申告には、この寄附金の領収書が必要となりますので、大切に保管してください

名古屋市 ⇄ 寄附者
①寄附の申し出
②払込書を送付
③寄附
④特例申請書の提出
⑤申告特例通知書の送付
⑥翌年度の住民税の減額
寄附者 → お住まいの市区町村

詳しくは、市公式ウェブサイト内 名古屋市文化基金 検索

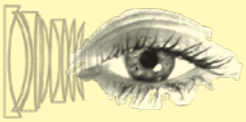
名古屋市

頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

KPC 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

舞台映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail：mpoffice@pa2.so-net.ne.jp
業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社

なごや文化情報は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

平成29年2月25日発行(隔月1回25日発行)通巻373号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp/